氏　　名　濱田正美（はまだ まさみ）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　論文博第 432 号
学位授与の日付　平成14年3月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究

論文調査委員　（主査）教授 間野英二　教授 庄垣内正弘　教授 杉山正明

論文内容の要旨

チャガタイ・テュルク語は，中央アジアのほぼ全域で用いられた書写語であり，東トルキスタンでは，その使用は16世紀の前半に始まり20世紀の20年代にまで及んだ。この間に作製された写本・文書の総数はもとより知るべくもないが，中国に所蔵されるコレクションが未開放であるため，現時点で研究者が利用可能な写本・文書の数は千点に満たない。しかしながら，内容が極めて多岐にわたるこれらの文献は，東トルキスタンの過去，就中その精神生活に関する情報の宝庫である。

ところで，歴史研究者にとっては遺憾なことであるが，東トルキスタンの文献のうち純粋な歴史書と呼びうるものは，19世紀後半からの一時期に書かれた20点余りを例外として，極めて少数である。これに対し聖者伝の類は，量的には遥かに歴史書を凌駕し，東トルキスタンのチャガタイ語文献中に重要かつ顕著な位置を占めている。

イスラームにおける聖者とは如何なる人々か，という問題に答えることは，実は容易なことではない。しかし，神との合一の境地に達した神秘主義者すなわちスーフィーと，神の道において殉教した戦士すなわちガーズィーとが聖者の範疇に含まれることは明らかである。スーフィー聖者たちの伝を編むことは，11世紀前半のスラミーの『タバカート・アッスーフィーヤ』に始まり，次の世紀には個人の伝記や語録であるマカーマートと呼ばれるジャンルが成立する。古典的な聖者伝はいずれも聖者の語録や奇跡的なエピソードの断片を年次を顧慮することなく羅列する方式を採るが，アナトリアのマナーキブ・ナーメや東トルキスタンの聖者伝では概ね一代記の形式が主流となる。従って，東トルキスタンの聖者伝のほとんどは，聖者の名を冠して何某のタズキラと題されている。タズキラという語の使用は，アッタールの『タズキラ・イ・アヴリヤー』に従ったものであろう。

東トルキスタンにあっては，聖者のタズキラの作製は，その墓（マザール）の存在と緊密に関連しあい，タズキラはマザールが真正の聖者の墓であることを証明する文献であった。20世紀初頭の東トルキスタンの歴史家ムッラー・ムーサーは，マザールの威徳それ自体を否定することはないが，それらのタズキラが恣に書き置かれたものであるとの指摘を行なっている。

一方，いわゆるカシュガル・ホージャ家の史書として名高い『タズキラ・イ・ホージャガーン』や1864年のクチャ反乱の指導者ラーシッディーンに捧げられた『タズキラトゥン・ナジャート』などは，主人公がスーフィーであるという点では確かに聖者伝であり奇跡譚とも見られるが，そこに記述されている事柄は架空の事件ではない。

上述したごとき純粋な空想の産物としての聖者伝と真正の歴史書としてのそれとの中間に，本論文で扱う二つの聖者伝『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』と『マウラーナー・アルシッディーン・ワリー伝』が位置する。すなわち，これらの聖者伝の著者は不明であり，かつその主人公の実在は他の史料からも確認されるが，その事跡とされるところは殆ど荒唐無稽な創作にかかる聖者伝である。

ここに取り上げた2種の聖者伝の本質的な性格をどのように考えるべきであろうか。換言すれば，姓名不詳の著者やコピストたちは何故にこれらを著作しまた筆写して流布させたのであろうか。

甚だ素朴に過ぎる感想ではあるが，先ずこれらの作品は現代人の我々の眼からしても物語として面白く通読に耐え得ると

いう点を指摘せねばならない。実はこれこそが，筆者が関心を持ち翻訳を思い立った理由である。この面白さ，娯楽性に鑑みるならば，これらの作品はアレッシオ・ボンバチに倣って前近代の庶民文学と呼ばれるに相応しい。ところで，その「庶民」は布施や喜捨を持って聖者のマザールに参詣する人々であり，これらの作品は彼らにマザールの威徳と利益を「楽しく」説き広める手段であった。成立期のマカーマートと同様に，これらのタズキラも聖者たちの墓の周りで，これと深く関わるダルヴィーシュやモッラーの手に成ったと考えて過たぬであろう。アルシッディーンの説教に含まれる，ウラマーとダルヴィーシュの世話を勧賞し義務づける長々しい言葉は，これを書いた当人がまさにそうした種類の人間であったことを如実に示している。

その著作の年代を確定することは出来ぬが，『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』については，その韻文ヴァージョンの完成が1744年であることから，もとの散文の成立は17世紀，『マウラーナー・アルシッディーン・ワリー伝』についても，末尾にホージャ・イスハーク・ワリー（1599年没）が登場することから，同じく17世紀の作と考えられる。

これらのタズキラは史料としての価値を持つであろうか。持つとすれば，如何なる意味で史料になり得るであろうか。

他の文献史料にも見える事件をタズキラが記述するとき，我々はそこに事件のいわば秘教的な解釈を見出すことが出来る。例えば，『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』が伝える，アブドゥッラティーフ・スルターンのキルギズへの遠征と敗死，アブドウッラシード・ハーンの報復遠征とホージャへの援助の依頼は，シャー・マフムード・チョラースの『年代記』も等しく記録するところであるが，その間の主要な差異は，ホージャは「偉大なるスルターン（サトゥク・ボグラ・ハーン）に援助を乞い，ハーンに出陣の許可を与えた」という連続する２句に事柄の経緯を纏めた『年代記』に対し，タズキラはこの２句の間に生起した，聖者たちの霊魂の示現とその援助の約束を詳しく記述するという点に存する。

我々の世界観では現実に生起した事柄は『年代記』に見える２句に尽きるが，しかし当時の人々，少なくともタズキラの著者や彼の仲間にとっては，現象世界はそれ自体では完結しておらず，不可視界の介入があって現実は初めて現実たり得たのである。彼らの世界観を再発見することも歴史学の任務の一部であるからには，事件に対する彼らの秘教的解釈こそが我々の関心の対象とならねばならない。

他の文献史料には全く言及されていない事件，事柄に関するタズキラの記述は如何に扱われるべきか。例えば，同じく『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』の，ホージャの威徳によって水が湧き出し村が出来，ハーンがそれらの村をサトゥク・ボグラ・ハーンのマザールのワクフにしたとの記述からは，最小限，マザールがワクフを有していたとの結論は導くことが出来る。何故ならば，聖者のマザールに対してワクフが設定されることは，イスラーム世界の全域で普遍的に認められる現象である。それゆえ，ほかの文献に記録がないという事実はサトゥクのマザールのワクフの存在を否定する根拠にはなり得ない。同時にこの場合にも，このワクフはホージャの威徳によるという解釈こそが当時の人々にとっての「現実」であったであろうという「事実」をも認識しなければならない。

一読して明らかなように，『マウラーナー・アルシッディーン・ワリー伝』はトゥグルク・ティムール・ハーンからアブドゥッラシード・ハーンに至るモグーリスターンの「歴史書」でもあるが，そこに記される事件の殆どすべては全くの荒唐無稽であって，『ターリーヒ・ラシーディー』等から知られる「史実」に合致するのはハーンの名前だけといって良いほどである。事実，ハーンについてさえ，ハーン家とホージャ家の間に姻戚関係を仮構するため，トゥグルク・ティムールの第三子チン・ティムールという存在をでっち上げている。人妻との姦通の罰を蒙って死ぬヴァイス・ハーンやヤルカンドをアブー・バクルに投げ捨てて逃亡するアフマド・ハーンなどはその荒唐無稽の最たるものであるが，奇妙なことにより小さな出来事には史実に一致するものもあり，例えば，タズキラに登場するアミール・フダーイドースト（写本によってはフダーイダード，これが勿論本来である）が，メッカに巡礼してそこで死亡する話は『ターリーヒ・ラシーディー』の所伝と合致する。

こうした事情から，タズキラは『ターリーヒ・ラシーディー』のような「歴史書」を参照しつつ書かれた「小説」ではないかと思われるのであるが，その執筆の目的がハーンの権力をも凌ぐホージャの宗教的権威の宣揚であったことは内容から如実に読みとれる。

すなわち，記述の内容は全て虚偽であるが記述の意図は真実である。トゥグルク・ティムール・ハーンを改宗させた後，クチャにやってきたアルシッディーンに対するクチャの住民の「我らを彼らからお救い下さり，彼らを永遠の罰からお救い

になりました」という言葉からは，オアシス定住民が山地の遊牧民をどう見ていたかが知られるばかりでなく，さらにはこの両者の間における宗教的権威の調停者としての役割をも読みとることが出来る。

要するに，繰り返しになるが，タズキラの世界では，伝えられる事件は虚偽であっても，虚偽を生み出す精神は真実なのである。そして，この事件の虚偽を真実らしく装うための細部は真実によって構成されている。登場人物の死去の度に繰り返される，死後四十日の振る舞いの記述やステレオタイプではあるが，スーフィーとビビすなわち男女が入り交じって行われるズィクルやサマーなどに関する描写は，虚構であると退けるには及ばない。これらは，宗教民族学もしくは民俗学に関する極めて貴重な情報である。

論文審査の結果の要旨

本論文は，17世紀の東トルキスタン（現，中国新疆ウイグル自治区）で，チャガタイ語（チャガタイ・テュルク語）で著された2種のイスラームの聖者伝，すなわち『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』と『マウラーナー・アルシッディーン・ワリー伝』の文献学的研究である。本論文は3章よりなり，第1章はこの2種の聖者伝を中心とする東トルキスタンのチャガタイ語文献についての簡明な解説，第2章は2種の聖者伝の日本語訳，そして第3章は論者によって作成された2種の聖者伝のアラビア文字による校訂テキストである。

本論文の最大の価値は，従来テュルク学者らによってほとんど触れられることのなかった17世紀東トルキスタンの2種のイスラーム聖者伝を，アラビア文字の校訂テキストと日本語訳とによって，初めて学界に紹介した点である。

まず校訂テキストについていえば，論者は1974年以来，ロシア，スウェーデン，フランスの諸図書館を訪れ，学界未知のこれらイスラーム聖者伝の諸写本の蒐集に努め，諸写本の内容の検討を重ねた。そして，長年月を要した精密な比較・検討の結果，それら聖者伝の写本が持つ特異な性格についての独自の知見を獲得し，この知見に相応しい形でこの2つの聖者伝の校訂テキストを初めて学界に提示した。

ここにいう，17世紀東トルキスタンの聖者伝に見られる特異な性格とは，それらの写本が筆写者（コピスト）によって作成される過程で，本来の著者不詳の原本（或いはその写本）に筆写者によるかなり自由な改変が加えられているという点である。つまり，筆写者にとって，聖者伝の原本（あるいはその写本）を筆写することは，単なる筆写という作業ではなく，一種の創作的な作業でもあったことになる。聖者伝の写本がこのような特異な性格を持つ以上，数種の写本の対校による原テキストの確定という作業，つまり通常のテキスト校訂の作業は，これら聖者伝の場合は不可能となる。

このため，論者は今回，二つの聖者伝のテキストをそれぞれ異なった二つの方針に従って作成・提示するという苦心の選択を行った。

まず，『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』については，諸写本の中で，叙述のスタイルがより素朴であり，後代の筆写者による語句・文章の追加が比較的少ないと思われる一写本，つまり原本により近いと思われる一写本（ルンド大学蔵，Prov. 73）を選択し，この写本の字句・文章にまったく改変を加えず，そのまま活字化するという方針を採用した。

これに対して『マウラーナー・アルシッディーン・ワリー伝』では，論者が現に手元で参照できた写本が限定されていたため，校訂テキスト作成に当たって，先の方針とはまったく逆の方針を採用した。すなわち論者は，後代の筆写者による語句・文章の追加がかなり多いと考えられる3写本（つまり原本からはより遠ざかり，原本よりも物語性がより強くなっていると思われる3写本）をテキストの土台（base-text）として選択し，それらの写本から適当と思われる字句を適宜選択してテキストを再構するという方針を採用した。この方針は，原本に最も近いと思われる写本（ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支所蔵，C558）がなお参照困難な現状（ただし，論者はその一部をすでに入手している）からすれば，理解できるものといえる。

なお，参照すべき写本が入手できなかったという事情によるとはいえ，論者の採用したこの方針によって，物語性に富んだ読み物としての聖者伝の特質が鮮明になったことは確かであろう。

ただし，この『マウラーナー・アルシッディーン・ワリー伝』についても，先の『ホージャ・ムハンマド・シャリーフ伝』の場合と同様の写本選択の方針がとられる事が望ましいことはいうまでもない。この点，今後の論者の研究の進展に期待したい。

とはいえ，論者はこれら二つの聖者伝のテキストを今回初めて学界に提示したのであり，論者の本論文を機に，特異な性格を持つこのような写本を如何なる方針に従って如何に扱うべきか，またテキストをどのような形で提示すべきかというテュルク文献学に関わる新たな課題が浮上したともいえる。この面でも論者の功績は決して少なくはない。

次に論者が，これらの聖者伝を分かりやすい日本語に訳出して提示した功績も高く評価される。いうまでもなく，この訳は文字通りの世界初訳であり，訳出に当たっての論者の苦労が偲ばれる。このテキストにはチャガタイ語の他にペルシャ語，アラビア語の部分も含まれる。本論文の日本語訳はこれらの諸言語をすべて扱いうる論者の優れた語学力を示すものである。論者の苦心の訳文を通読すれば，従来よく知られていなかった東トルキスタンのイスラーム聖者伝について，確かな認識を獲得できることは明白である。

さらに第１章の簡明な解説の部分も，長年の研鑽に基づく東トルキスタンのチャガタイ語写本，特に聖者伝についての論者の深い学識を証明するものとして高く評価される。

まず論者は，東トルキスタンで作成されたチャガタイ語写本の各国における現存状況について具体的に記述するが，この記述はチャガタイ語写本を求めて度重なる海外調査を行なってきた論者にして初めて可能な記述といえる。次にチャガタイ語写本を内容別に解説するが，このような解説も他所では見ることのできぬ有用なものとなっている。

また，東トルキスタンの聖者伝について，聖者伝の両極には真正の歴史記述にかなり近い作品，つまり聖者の真正な事跡を踏まえた歴史的な作品と歴史事実を全く無視した空想の産物としての非歴史的な作品があることを明らかにしたのち，本論文で扱った２種の聖者伝がこの両極のちょうど中間に位置する作品であることを明確にした点も貴重である。

さらに，このような荒唐無稽な物語をも含む聖者伝を歴史研究の史料として利用する場合，伝えられる事件は虚偽であっても，その虚偽を生み出した著者の精神は確かに存在したこと，つまり著者の叙述の意図・目的は事実として確かに存在したことを看過すべきでないという論者の指摘もきわめて重要である。つまり，聖者伝にどれほどの歴史的事実が含まれているかということよりも，歴史的事実とは無関係の物語を，人々がなぜ作ったのかという叙述の意図に着目し，ある時代の，年代記などからは計り知れない人々の世界観を再発見すべきだという論者の提言は傾聴に値する。論者はこの観点から二つの聖者伝の内容を検討した結果，その執筆の目的がハーン（チンギス・ハーンの子孫で，俗的世界の権力所有者）の権力をも凌ぐホージャ（預言者ムハンマドの子孫で，宗教界の指導者）の宗教的権威の宣揚であったことを明らかにしている。このような考え方は，歴史研究者である論者の史料に対する柔軟な姿勢を示すものであり，宗教民族学もしくは民俗学の領域とも関わりうる論者の今後の研究の発展を期待したい。

このように本論文は，テュルク文献学に関する論者の深い学識と歴史学者としての柔軟な思考を反映した優れた研究として高く評価される。

ただ本論文にも，すでに触れた点の他にも，なお望ましい点がないわけではない。日本語訳文の中には，特にペルシャ語韻文の訳出に当たって訳語の正確さを欠いた場合も散見する。また日本語の訳のみでなく，固有名詞や術語についての詳しい注が付けられることが望ましい。しかし，これらは本論文の内容からすれば望蜀の言を述べたものにすぎず，その優れた価値を少しも損なうものではない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年１月31日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。